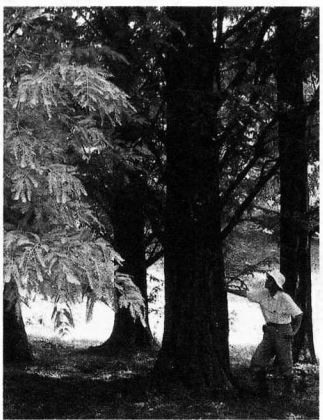


石炭になった樹木とその環境(後)

前編に引き続き、北部九州の代表的な石炭植物と、その炭化の過程についてお話ししましょう。

炭化するには水中貯木の効果で、まず腐らせずに泥炭となるのが条件です。寿命や大型台風などで水中に倒木がたい積した古ヌマスギは、次第に厚くなって水圧・土圧などさまざまな圧力が加わることで、石炭化したと考えられます。つまり、

泥炭の上部や浅い水中の根株は二酸化珪素の作用で珪化木となり、下部は石炭になったのです。淡水の浅い湖沼が広がっていたと思われる福岡・佐賀・長崎・山口各県で古ヌマスギが生えていた湿生林の水深が深い所は石炭に、ごく浅く根株が露出する個所は珪化木の化石になりました。珪化木で名高いのが北九州市戸畑区夜宮公園の国指定天然記念物「大珪化木」と、福岡市東区名島の県指定

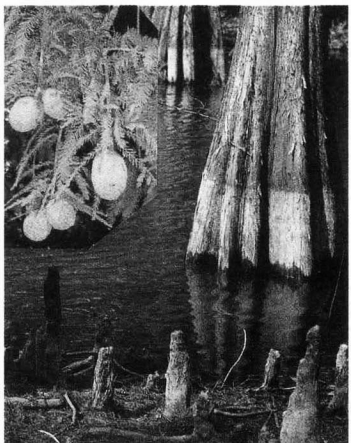


【資料E】水生しなかったので石炭にならなかったスギ科メタセコイヤ。日本の新世代第3紀の化石樹木として有名。(九大演習林)

天然記念物「帆柱石」です。

実は、九州大学演習林にある『篠栗九大の森』には古ヌマスギに近い現在のヌマスギ(ラクウシヨウ)があります。これは蒲田池の北東池畔に植えられて約40年経つ群落で、膝根がたくさん出ています。訪れて、ぜひ篠栗町の石炭とその時代の環境に思いをはせてください(資料D)。そして水湿地に生育しないため化石で残るのがまれですが、同じ古第三紀層地質時代のスギ科落葉樹で呼吸根をまったく出さないメタセコイヤ(昔、わたしは長崎市郊外で化石を採集したことがあります)

す)の約40年生群落も併せて眺めるとよいでしょう(資料E)。2つの化石樹木群からわれわれ人類の祖先はそこらどうだったのか、環境は、などと思案するのはロマンあふれる楽しいことです。石炭は200年前の江戸末期には焚石(燃える石)として、50年前までは産業の主役として町を繁栄に導いてきました。が、エネルギー革命によつて150年足らずの短い歴史を閉じました。しかし石炭そのものは、植物と地球との悠久の地史からできた宝の産物に違いはありません。そして環境の面から考えて、現代でも十分に利用研究の余地が残されているのではないのでしょうか。炭鉱閉山時から半世紀経過して改めて考えさせられるところです。



【資料D】古ヌマスギに近い今のヌマスギ(ラクウシヨウ)。北米南部の沼沢地に生え、細長い葉を互生し松かさをつけ、根から呼吸根を出す。(篠栗九大の森)

西南学院大学非常勤講師
町文化財専門委員

井上 晋